もうじきたべられるぼく

上小松小学校　一年　渡辺　陽日

書名「もうじきたべられるぼく」

著者「はせがわゆうじ」

この本は、もうじき人げんにたべられてしまうウシの子が、しぬまえにおかあさんに、さようならをいいにいくというおはなしです。

むかしくらしていたぼくじょうに、ひとりこっそりあいにいくけど、おかあさんにはもうほかに子どもがうまれていて、たのしそうにあそんでいました。

「やっぱり、もうじきしぬぼくなんかには、あいたくないかな。」とおもってかえろうとしました。でも、おかあさんがきづいてくれて、でんしゃにのってしまったぼくをおいかけてきてくれたので、さいごにひと目あうことができたばめんで、なみだがでました。まだ、わたしくらいの子どもなのに、じぶんがしぬということをうけとめて、「せめてぼくをたべるひとがじぶんのいのちをたいせつにしてく

れたらいいな。」とさいごにいったところが、とくにこころにのこりました。

いままで、スーパーでおにくをみても、もうウシのかたちではないので、なにもかんじませんでした。のこさずたべるようにしていたけど、ただおこられたくないからそうしていました。

よみおわったとき、とてもかなしくなっていままでたべられなくてのこしてしまったどうぶつたちに、しんけんに「ごめんなさい。」といいたくなりました。わたしは、たくさんのおにくやさかなをたべています。かわいそうだけど、そうしなければ人げんはいきられません。ウシの子は、たくさんやりたかったことがあったし、もっとかぞくとしあわせにながいきしたかったとおもいます。だから、これからは、いきものたちに「ありがとう。」とおもいながらたべます。いままでにもらったいのち、これからもらういのちのぶん、こうかいややりのこしのないいきかたをすることが、いのちをたいせつにするということなのかなとおもいました。ウシの子が

おねがいしたとおり、じぶんのいのちをたいせつにします。それがいまのわたしにできることです。（原文ママ）